

内田能嗣・塩谷清人編

『ジェイン・オースティンを学ぶ人のために』

京都：世界思想社、2007、2,200 円、308 頁。

武井 暁子



編者を含む 28 名の執筆陣によって上梓された本書は、表題のとおり、主にこれからオースティンを読もうとする初学者対象に執筆された入門書である。2006 年に日本オースティン協会が創立されたことによって、オースティンを共に読み語る場ができ、日本の読者にオースティン文学の魅力を啓蒙する機会は飛躍的に増えた。このような流れの中での本書の出版は意義があり、執筆陣の意気込みが感じられる。

第 1 章（内田能嗣）はオースティン伝で、1775 年の誕生から 1817 年の病没までの 42 年の生涯が写真つきで簡潔に解説されている。最後のオースティンが生きた時代背景と家庭環境をふまえたオースティン文学の分析とブロンテ、ジョージ・エリオットとの比較論は、女性と文学がこれからも重要な研究テーマであることを示す。

第 2 章（塩谷清人）はオースティン研究史で、伝記、批評史、時代背景とコンテキスト研究の各分野での定評がある研究書にバランスよく目配りしつつ、オースティン研究が伝記の掘り起こしから始まり、フェミニズム批評、さらにポストコロニアル批評に移行していったプロセスが一読してわかる。

第 3 章は六大小説論で、本書の核をなす部分である。執筆陣 28 人のうち 3 分の 2 に相当する 18 人が携わり、作品ごとのあらすじと解説、原文と訳注、作品論をそれぞれ別の執筆者が担当している。執筆者各自の個性のありように興味はつきぬものの、ここでは、紙幅の関係から作品論のみを見ていく。

『ノーサンガー・アビー』論（大田美和）は、主人公キャサリンではなく、主

要男性登場人物のヘンリー・ティルニーとティルニー将軍の性格分析に大部分が
あてられ、入門書を超えた新鮮味がある（以下、作品の題名と人物名はすべて本
書の記述に従う）。一例を挙げると、ヘンリーとティルニー将軍の行動を時系列
にしたがって綿密に検証し、ヘンリーは「時間の進行に素直に従い、良識に基づ
いて事を運ぶことで（略）良識ある人という好印象を与えることに成功している」
(p.72)、ティルニー将軍は「自然な時間の進行に逆らうような行動が目立ってい
る（略）このような将軍の時間支配は、扇をあおいで日没を遅らせたという藤原
道長にも匹敵するような支配欲によるものである」（p.72）との考察は、道長伝
説はともかくとして、新しいヘンリー像、ティルニー将軍像を提示していて、興
味深い。

『分別と多感』論（植松みどり）は、「本当は怖い、幸せ物語」との副題が示す
ように、この作品がいかに「めでたしめでたし」の結婚物語からかけ離れている
かが主題である。筆者は、作中で多用される“happy”に付加される逆説的な意味
を例示し、3組のカップル（エリナとエドワード、マリアンとブランドン、ルーシー
とロバート）の結婚が、ルーシーの一方的な婚約破棄とパートナーのすり替えに
端を発する「ドミノ倒しのような結婚パターン」（p.97）に導かれていることな
どを論じ、初期作品の中では、とかく欠点が論考の対象になりがちなこの作品を
「オースティンの面目躍如たる作品」（p.109）と評価する。

『高慢と偏見』論（鈴木美津子）は、ロバート・ベイジ（1728-1801）の小説『ハー
ムスプロング』（1796）の人物創造がオースティンに影響を与えているという指
摘から始まり、中でも顕著な例として、『ハームスプロング』のマライア・フルア
ートと『高慢と偏見』の主人公エリザベス・ベネットが求婚を拒絶する場面の相関
性を挙げる。この作品とリチャードソンの『サー・チャールズ・グランディソン』
（1753-54）、バーニーの『エヴェリーナ』（1778）、『セシリア』（1782）との影響
関係はすでに定説になっているが、『ハームスプロング』からの影響を論じたのは、
評者が知る限りでは、筆者が初めてである。今後、さらに本格的な論文の形で読
みつなぐことができればと思う。

『マンスフィールド・パーク』論（坂本武）は、主人公ファニー・プライスにとつ
てもっとも重要な4つの出来事（サザトン訪問、素人芝居上演、社交界お目見
え、生家への帰郷）を解説し、オースティン作品の主人公の中で、もっとも理

解しがたく、読者の共感を呼ばないといわれている、ファニーの人間像を明らかにしようと試みる。だが、ファニーの性格分析をするなら、彼女のペルソナを決定づける最大の要因である、裕福な養家での貧乏な居候という立場と虚弱体質をもっと詳しく論じるべきだったであろう。

『エマ』論（廣野由美子）は、「誤解を読み解く」との副題通り、プロットを動かす原動力である、エマが誤解にいたるまでの心理的プロセスを、彼女とエルトン、フランク、ナイトリーの恋愛がらみの関わりから探り、「『私は正しい』という鉄則が、エマの最大の盲点であったと言えるだろう」（p.192）と結論づける。前半3つの作品論が新機軸を打ち出す傾向があるのとは対照的に、この作品論はテキストに即した綿密かつ手堅い読みを基本とするものである。この姿勢は、大学院生がまず習得するべきであるし、批評理論の流行にとかく左右されがちな研究者が忘れてはならないものである。

『説得』論（川口能久）は、冒頭で、作品の特色を「時代に対するオースティンの意識がほかの小説以上に明確に反映されていることである」（p.211）としながらも、大半はジェントリーと海軍軍人の階級対立、そして分別とロマンスの対立、という従来の視点から考察する。結末では、「分別は依然としてオースティンの基本的な立場である。しかし『説得』において、彼女はロマンスとでも呼ぶべき、分別では抑えきれない感情の存在を認めている（略）アンとウェントワースがロマンスを回復するという作品全体のプロットを考え合わせれば、彼女がロマンスに身を乗り出そうとしている、と考えるのが自然であろう」（p.223）と論じる。前述の『エマ』論と同様、堅実さに力点をおいた作品論である。

第4章は、オースティンの習作時代の3作品（『愛と友情』、『レディー・スーズン』、『ワトソン家の人々』）と、遺作『サンディトン』論からなる。習作論のうち2つはオースティンの本質をおさえつつ、現代社会との共通点を模索する姿勢が見られる。例えば、『愛と友情』論（住谷和子）は、「オースティンの揶揄は（略）自己満足的な『感受性』に向けられている。私たちの嘲笑もまた……（原文ママ）」（p.234）としながらも、結論で「ソフィアも言うだろう。『私の死因となった卒倒をあなた方はお笑いですが、それは女性性の象徴と考えることができないのでしょうか。あなた方の社会の女性性の象徴と言える瘦身を、メディアはこぞって賛美し、女性はそれを実践してはいらっしゃらないのでしょうか（略）』

と。このような問いがかえってくる時、私たちはそれでも彼らを嘲笑することができるだろうか」(p. 236)と、登場人物の架空のコメントという形で、読者に疑問を投げかけ、「オースティンの揶揄」(p. 234)の時代と国境を越えた普遍性を明らかにする。この手法は賛否がわかるであろうが、一般読者がオースティン作品に対して抱きがちな「わかりにくい」「古めかしい」との先入観を払拭する努力は評価するべきである。

締めくくりの第5章(大島一彦)は、オースティン文学の特色を論じたものである。筆者はオースティン作品に登場するジェントリー階級の特質について、簡潔かつわかりやすく解説する。しかる後に、オースティン文学を理解する上で不可欠な「センス」「センシビリティ」「ユーモア」の本質を考察し、登場人物の資質を「センス」「センシビリティ」の正と負の資質に分類し、「ユーモア」と「ユーモア精神」の違いを論じる。前者の分類には全面的に賛成しかねるところもあるが、結論の「コリンズ司祭やベネット夫人には気質から無意識に滲み出るユーモアはあるが、自覚された意識的なユーモア精神はないと言ってよい。そういう彼らがなぜ滑稽に描かれうるのか」と言うと、それはユーモア精神を心得た作者と、やはりユーモア精神を心得た他の登場人物たち(略)によって彼らが眺められているからである」(p. 280)との見解は当を得たものである。

この他、本書には、オースティンの家系図、オースティンが生まれ育ったステューブントン周辺の地図、年譜、参考文献、索引といった補助資料がつけられており、至れり尽くせりである。第3章前半の作品論3つは、本書の主要読者層である初学者にはいささか難解な感があり、遺作の『サンディトン』は初期作品とは別の章で論じたほうが読者の理解をいっそう得やすかったと思われるものの、本書はこれから「オースティンを学ぶ人」が一読する価値は十分ある書である。

(中京大学教授)